

朝出なら、病人が出て、怪我人が出て、どうすることも出来ず、仕事仕事のみ。毒草で脳がおかされても、日本に帰りたいことだけの神経はすぐひらめく。抑留者全員がどうしてこんな所に連れてこられたのか、考えれば考えるほどなまげない、くやしい。ただただ一日も早く日本に帰してくれることを祈る気持ちの毎日だった。

妻子五人を失った抑留残酷記

新潟県 関川 信 二

戦争末期の八月十日、前日あやしい飛行機が我が社鶴岡炭鉱の上空に飛来した翌日、関東軍司令部から非常召集令状がきた。「会社の在郷軍人会長である君は、会社の在郷軍人全員をいんそつし、牡丹江司令部へ行け」との社長代行の言葉。在郷軍人以外の社員と家族は代行がいんそつして新京に行く。家族のことは心配するなどの伝言で、妻と小学校一年生の長女を頭に四人の子供達

に、そのむねを話し、八月十一日早朝、在郷軍人百人をいんそつして牡丹江へと急行した。

某大佐の指揮下にへんにゆうされ「鶴岡隊」と命名され、他からの在郷軍人も加わり、総員二百人、当時予備役陸軍主計中尉の私と、軍医中尉の二人が将校、私は隊長として指揮をとることとなり、昭和十二年北支事変召集以来二度目の軍人生活に入った。

司令兵たん部には兵器類、被服類はかいむ。兵舎は猫の子一匹見当たらない。仕方がないので応召の服装そのままに木銃で守備をかためることにした。

八月十五日夕刻、軍司令部命令で、牡丹江撤去、十八日までにチャムスに集結がくだった。チャムスに着いたら、命令受領のため、将校を司令部に派遣せよとのこと、相談の結果、軍医中尉をはけんし「降服命令」が伝達された。

八月十九日早朝、軍司令部命令で武装放棄した。

数日後、牡丹江の兵舎に収容されて、外出禁止。九月一日、全員集合「海の見えるところへ行く、初めは徒歩、汽車が来たら乗せてやる」との命令。「海の見えると

ころなら港のあるところだ、すぐに日本に帰ることができると話し合い、よろこびの気持ちで、一泊二日野営をしながら鉄道ぞいの国道を行軍。牡丹江を発した汽車が来たが、来る汽車も、来る汽車も家具、機械類を満載してあるので、一向に乗れそうにもない。

三日間行軍で、ソ連領に入ったら、ソ連のトラクにぶんじょうされ、名も知れない山中に送られ、ただちに伐採作業に狩り出された。ノルマつき強制労働の第一歩である。その後、作業部隊がいくどとなく編成され、鶴岡隊もぶんだん四散となっていた。

昭和も二十二年となった。将校は全員指揮権をはくだつされ、モスクワで共産主義教育を受けてきた者が作業隊指揮者となり、生死限界地獄の強制労働が続き、私も仲間を助けようとして、見つけられて、一週間の責め苦を重営倉のなかですごした。とにかく日本に帰りつくまでは死んでたまるか、としてなんとか頑張りとおし、ダモイをゆるされたのは二十三年十一月、ナホトカから舞鶴港についたのは十二月一日であった。

故郷・新潟県新発田市に帰ってみたら、鶴岡炭鉱で別

れた妻子五人の遺髪が実家に届けられていた。妻子五人は、私と別れた後、会社の人達と共同生活をしていて、寒さと飢え、非衛生の生活のため、昭和二十年中に子供四人は死亡、妻は二十一年八月、帰国することになり、社員達と共にナホトカ港に行ったが、検査で伝染病診断で新京に送還され、新京伝染病院で死亡したことが、新発田市出身の病院職員の説明が、持参の遺髪とともに実家人になされていたのである。

ああ！無情と天をおおぐ私であった。

ダワイ・ヴィストレー

新潟県 片山 正治

千島ウルフ島から「日本に帰す」と言われてついた港がソ連領ポートワニ港の収容所だった。

マンドリン自動小銃にかこまれ、鉄条網にかこまれた堀立小屋、コーリヤン、馬糧、脱穀しない米、大豆かすの食糧。この食事の粗末さのつぎの大敵は寒さであつ